



たいじゅ もり  
大樹の森

2月号

<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/fudomaru/>

### 伝統の「たすき」をつなぐ

校長 山下 謙一郎

今年も1月2日、3日に正月恒例の箱根駅伝がありました。優勝は青山学院大学で、総合タイムは10時間43分42秒という途方もない新記録でした。終始安定したレース運びで、首位がなかなか変動しない盤石の第98回大会でもありました。私は陸上部の経験があるわけではないのですが、なぜかお正月はこの箱根駅伝をついつい見てしまいます。特段、この大学を応援しようというのではありません。それでも見てしまうのは、当日までの選手や監督をはじめとしたこれまでの苦労や努力、支えてくれるサポートの方々の熱い思い、そしてレース中に起こるドラマのようなシーンを見たり、感じたりするのが好きだからなのでしょう。優勝争いやシード権争いも気になりますが、時間内にたすきがつながらない…という場面を見たときには、ぐっとくるものがあります。

さて、不動丸小学校を引っ張ってきてくれた6年生が小学校生活を過ごすことができるのも、本当に残りわずかとなってきました。たてわり班活動をはじめ、委員会活動やクラブ活動など、多くの場面で6年生が中心になってがんばっている姿を、私はよく見かけます。「ご苦労様。助かります。」「ありがとう。」そういう言葉をかけると、誰もがにこっとしてそっと会釈をしてくれます。誰かに強制されたわけでもなく、自分の考えでこうすべきだと考えて動く6年生の姿を、私は本当に自慢に思います。

先日、6年生の卒業文集の原稿を読む機会がありました。いろいろな内容の文集がある中で、自分が低学年だったときの優しい6年生の姿を「憧れ」として見ていたという思いを書いている子が多いことに気付きました。自分が6年生になったら、そうなりたい、あるいは6年生になって自分が低学年に優しくできて嬉しかった、という表記もありました。自分がされて嬉しかったこと、ありがたかったことは、子どもたちの心に確実に生き続けている、そしてそんな6年生の姿を今度は自分が継承していく、不動丸小学校の伝統の「たすき」は、確かに受け継がれています。箱根駅伝のたすきのように、この素晴らしい気持ちのこもった「たすき」をこれからもつないでいけるように、不動丸小学校教職員一同で子どもたちを支援していきたいと思えます。